目をこらして（19）

「ここで遊んだんだよね」。

なつかしそうにしゅんくんが言う。プラタナス並木を歩いていた時のこと。あたりを見回しながら「いっぱい葉っぱあったのに、無くなっちゃったね」とつぶやく。

＊

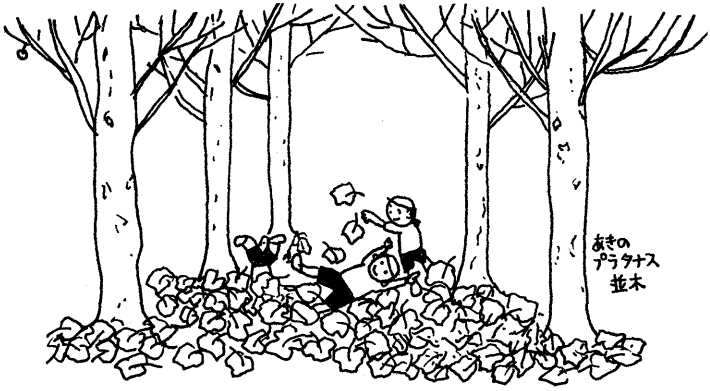
晩秋の頃、この道は一面の落ち葉で埋まる。プラタナスの落ち葉は大きい。その落ち葉が山のようになっているのに一番始めに気づいたのが彼だった。

「すごいとこ見つけたよ！」というしゅんくんのニュースは、瞬く間に皆に伝わった。落ち葉の大きな山は、中に入り込むとまるで海のようだった。

「ザバザバ、クジラだぞ」「逃げろ」と、魚になって追いかけっこをしたり、「雪だ！」と葉っぱをかけ合ったりして思う存分遊んだ。体中落ち葉まみれにして遊んだ。

ごろんと横になり空を見上げると、青い空に葉を落としたプラタナスの木が涼しげに揺れているのが見えた。

みんなが、そうやって楽しく遊んでいる様子を、しゅんくんは、うれしそうに眺めていた。



耳をすまして

その頃（四歳児クラスの秋）彼は友だちと楽しく遊ぶことができずにいた。遊びたい気持ちはあるのにすぐ友だちとぶつかりあい一人になってしまうことがよくあった。

それが今、自分が見つけた場所でみんなが楽しく遊んでいる。いつまでも楽しく遊んでいる。彼はそのことがとてもうれしいのではないかと私は思った。

「しゅんくん、いい所を見つけたね！」と話しかけると「うん、また明日も来ようよ」と弾む声で彼はこたえた。

＊

季節は移り、道を覆い尽くしていた落ち葉は一枚も見あたらない。春の風を受け小さな緑の葉が風にそよいでいる。そんな並木の下を歩きながら、なつかしそうにしゅんくんが言った。「葉っぱの山、僕が見つけたんだよね」。

葉っぱの記憶は、みんなで楽しく遊んだうれしい気持ちと一緒にしまわれている。

季節はめぐりもうすぐ落ち葉の季節になる。私たちはきっとあの道に行くだろう。きっと駆け出して行くだろう。

絵と文　宮里暁美（目黒区立ふどう幼稚園）